

.....る飾を末年き佳
稿播謡形人の走師



女の格闘
交楽稿

恒苞

候申勤相夫太津本竹下紋處此

乍憚口上

紀元二千六百年國を擧げての慶祝に當座に於ても此度は從來の慣例を破つて特にこのよき年の掉尾を飾るべく一座顔ぞろひの本格興行を開演致し聊か皆様への奉仕に務むる事と相成申候次第に御座候

就ては殊さら此度は當座の秘藏狂言より豊かなる内容を盛れる選擇を加へ配役の上にも一段と工夫を加え皆様への御興味ふかきやう茲に絢爛の豪華番組を試み申候次第にて出演の一同は新體制に即應して一意専心奮勵努力仕候間何卒いつくにも倍して御來場御聲援を賜り度偏へに御願奉申上候
昭和十五年師走の月

四ツ橋畔

文樂座 敬白

昭和十五年十二月一日初日

初日午後三時開演
毎日午後四時開演

・御觀覽料・

一等席 御一名 金三圓三十錢

(二階座席三十錢上り)

二等席 御一名 金一圓三十錢

三等席 御一名 金六 十 錢

(各等入場税別)

一等御座席
一等椅子席) は五日前より

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南[㊦]四七壹壹番
專用電話

一般御用 南[㊦]三〇三二番
の電話 南[㊦]三七八八番

お草履の準備は御座りますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますから御便利で御座ります。

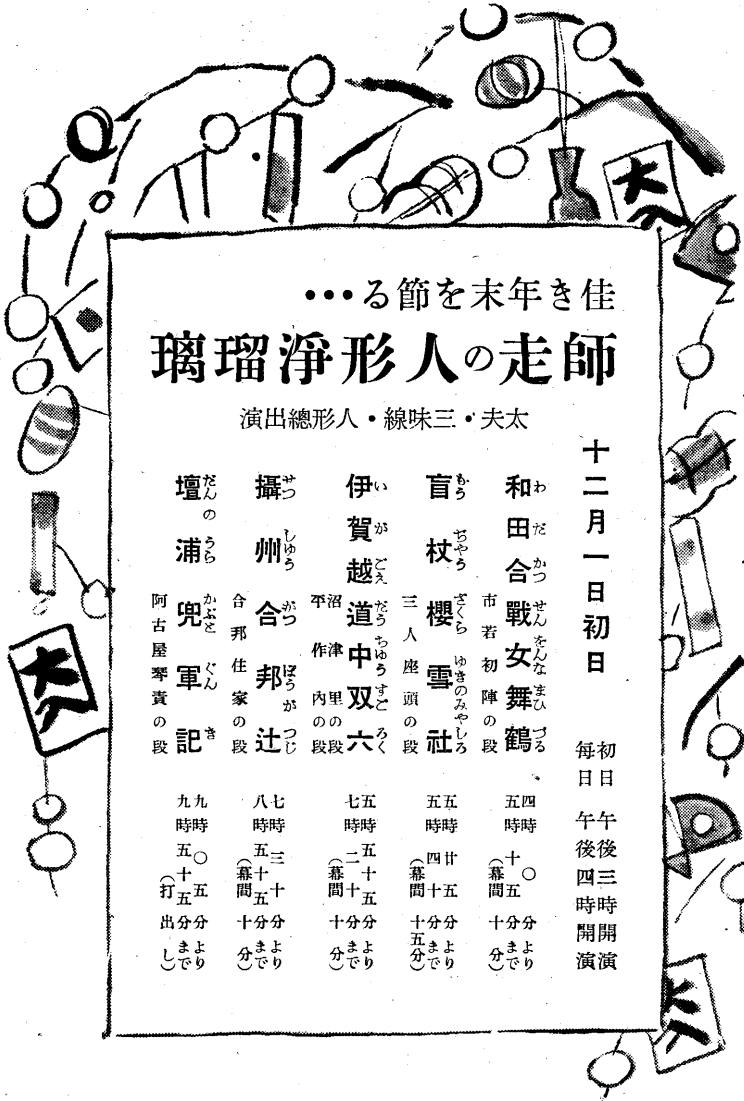
…る節を末年き佳
師走の形浄瑠璃

演出總形人・線味三・夫太

十二月一日初日

初日 午後三時開演
 毎日 午後四時開演

壇 <small>だんの</small> 浦 <small>うら</small>	撮 <small>せつ</small> 州 <small>しゅう</small>	伊 <small>い</small> 賀 <small>が</small> 越 <small>こえ</small>	盲 <small>もう</small> 杖 <small>ぢやう</small>	和 <small>わ</small> 田 <small>だ</small> 合 <small>かつ</small>	
兜 <small>かぶと</small>	合 <small>がっ</small> 邦 <small>ぱう</small> 住 <small>が</small> 家 <small>つじ</small> の <small>段</small>	平 <small>へい</small> 沼 <small>づま</small> 津 <small>つ</small> 作 <small>さく</small> 内 <small>うち</small> 里 <small>の</small> の <small>段</small>	道 <small>だう</small> 中 <small>ちゆう</small> 双 <small>すわう</small> 六 <small>ろく</small>	櫻 <small>ざくら</small> 雪 <small>ゆきの</small> 頭 <small>のみやしう</small> 座 <small>ざ</small> 頭 <small>の</small> の <small>段</small>	市 <small>し</small> 若 <small>わ</small> 初 <small>しつ</small> 陣 <small>じん</small> の <small>段</small>
阿 <small>あ</small> 古 <small>こ</small> 屋 <small>や</small> 琴 <small>きん</small> 賣 <small>ばい</small> の <small>段</small>	軍 <small>ぐん</small> 記 <small>き</small>	七 <small>しち</small> 時 <small>じ</small> 三 <small>さん</small> 十 <small>じゅう</small> 分 <small>ぷん</small> 五 <small>ご</small> 分 <small>ぷん</small> より	七 <small>しち</small> 時 <small>じ</small> 二 <small>に</small> 十 <small>じゅう</small> 分 <small>ぷん</small> 五 <small>ご</small> 分 <small>ぷん</small> より	五 <small>ご</small> 時 <small>じ</small> 五 <small>ご</small> 分 <small>ぷん</small> より	五 <small>ご</small> 時 <small>じ</small> 五 <small>ご</small> 分 <small>ぷん</small> より
九 <small>く</small> 時 <small>じ</small> 五 <small>ご</small> 分 <small>ぷん</small> より	八 <small>はち</small> 時 <small>じ</small> 五 <small>ご</small> 分 <small>ぷん</small> より	五 <small>ご</small> 時 <small>じ</small> 五 <small>ご</small> 分 <small>ぷん</small> より	五 <small>ご</small> 時 <small>じ</small> 五 <small>ご</small> 分 <small>ぷん</small> より	五 <small>ご</small> 時 <small>じ</small> 五 <small>ご</small> 分 <small>ぷん</small> より	五 <small>ご</small> 時 <small>じ</small> 五 <small>ご</small> 分 <small>ぷん</small> より
(打 <small>うち</small> 出 <small>だ</small> し)	(幕 <small>まく</small> 間 <small>ま</small> 十 <small>じゅう</small> 分 <small>ぷん</small> まで)	(幕 <small>まく</small> 間 <small>ま</small> 十 <small>じゅう</small> 分 <small>ぷん</small> まで)	(幕 <small>まく</small> 間 <small>ま</small> 十 <small>じゅう</small> 分 <small>ぷん</small> まで)	(幕 <small>まく</small> 間 <small>ま</small> 十 <small>じゅう</small> 分 <small>ぷん</small> まで)	(幕 <small>まく</small> 間 <small>ま</small> 十 <small>じゅう</small> 分 <small>ぷん</small> まで)



文樂鑑賞手引

文樂の鑑賞に役立ちさうなことを、簡単に、全體的の事についてだけ書いて見よう。

文樂座のこと——人形淨瑠璃の組織とその由來

——舞臺のこと——人形の遣ひ方のこと——だいたい、そんな順序で申上げてみませう。

人形淨瑠璃では、文樂がたつた一つの傳存劇團

になつてしまつた。地方的、郷土的にはほかにもあるが、常設劇場を有するものと言つてはない。

けれども、文樂は寛政年度、おほよそ百五十年ほど前、淡路の人植村文樂軒によつて大阪に生れた劇場である。さうして、この三四十年來は、殆ど

本邦唯一の人形劇團なのであつて見れば、「文樂」が「人形淨瑠璃芝居」の同義語のやうになつたのも當然でせう。古い所では、江戸にも大阪にも、五座七座と人形芝居があつて、歌舞伎に對抗し、時としては、享保から寶曆あたりまでは、つまり二百年前には、人形芝居のほうが盛んであつた。

普通に、三業より成り立つと言はれる。即ち、淨瑠璃を語る太夫と三味線弾きと人形遣ひの三者によつて組織されてゐるからである。ところで、この三者は、初めから一緒に生れて發達して來たかといふに、さうではなかつた。

人形を遣ふといふこと、これはずうつと古くからありました。記録にあらはれた所では、遠く平安時代に傀儡子（くゝつまはし）といふものが見える。傀儡子は、支那の西方、中央アジア地方から漂遊して来た街頭演藝人であつたらしく、平安時代とあれば約一千年の前のことになる。淨瑠璃は足利時代中期の發生となつてゐるから、五百年の歴史と言へるでせう。これに對して、三味線は

永祿年中に、琉球から泉州堺港に輸入された蛇皮線の本邦化なのであるから、ザツと三百七八十年前の舶來樂器である。先づ淨瑠璃と三味線とが提携し、慶長の初年あたりに、その淨瑠璃と人形遣ひとが握手して、淨瑠璃といふ物語を、言はゞ立體的に空間的に演奏するやうになつた。これが人形淨瑠璃劇の濫觴だといふことになる。

併しながら、その淨瑠璃界に竹本義太夫があらはれて音楽上の大成を試み、作者近松門左衛門を

得て、戲曲的展開をも試みたのは、元祿時代のことに屬する。爾來二百五十年間、人形淨瑠璃芝居とあれば義太夫節に限るやうになつたのであつたこれは來歴のあらましであるが、淨瑠璃と三味線とによる演奏内容と人形の動作とがピッタリと合致して、三者諧調の美によつて成立する藝術なる點に、先づ御留意ありたい。

次に、人形と人形遣ひのこと。これも歴史的に言ふと、暑ツ苦しくなるから、簡単に記す。

人形が手も足もないデクノボーから、肩板が發明され、手、足が生じ、口や眼の開閉や眉の上下が研究され、手の五指が折り屈みをするやうになるまでには、容易ならぬ年月と人知とが費された一個の人を三人がゝりで、寫實的に遣ふやうになつたのが享保十九年の「蘆屋道満大内鑑」（葛の葉の狂言）からといふことになつてゐる。今日か

ら大凡二百年前にあたる。但し、文樂座でもツメ人形（略してツメ）と呼ばれる、ごく下ツ端の役柄のは、一人で一個の人形を遣ふので、原始形式の人形なのです。

現今、文樂座の座頭と呼ばれる吉田榮三とか、吉田文五郎とかいふ上だつた遣ひ手、實盛なら實盛、お園ならお園の遣ひ手として、番附の上に記載されてゐるのは、「主遣ひ」と呼ばれる主任者で、頭と右手の動作を受け持つ。「左り」と呼ばれて左り手だけを遣ふ人が一人、「足遣ひ」といふ兩足の動作を受け持つのが一人。つまり三人遣ひといふことになる。この三人が主遣ひの呼吸に合わせて動作せしめてこそ、統一ある一個の人形として演技するので、これがまたむつかしい。足遣ひだけで十年近くも働らき、それから左りにまはり、やがて主遣ひに進む。

人形淨瑠璃の舞臺——それにも幾變遷があつた慶長以前の傀儡子時代のは、所謂首掛芝居で、一尺巾に二尺か二尺五寸限度の長方形の箱が舞臺であつた。それが次第に擴大されて、明治座の舞臺でも歌舞伎座のでも、何とかして使ふやうになつた。現今の大坂文樂座の舞臺は、間口が六間より少しつまつた程度であるが、それ以前のは、三四間から五間くらゐのものであつたらしい。手遣ひ式でない絲操り式のは、もつと規模が小さかつた。

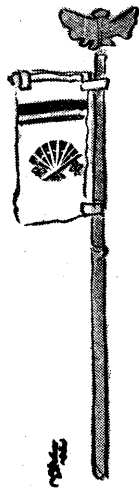
今の舞臺は、見物席寄りに三尺ほどの幅で、使はない部分がある。これが三の手。それから船底とも呼ばれて床の低くなつてゐるところ、歌舞伎の平舞臺に該當する部分が二の手である。二重舞臺に相當して、屋内に用ひられる、最も奥に位置した部分は一の手、または本手といふ。元來は本手といふ本舞臺だけであつたのが、次第に擴大されて二の手三の手と見物席の方へ張り延ばしたから

の名稱である。

また、太夫と三味線とが、向つて右側へ張り出した床で語り、弾く。即ち横床といふものになつたのも享保年度のこと、義太夫近松頃は、特別の場合以外は、正面の御簾の内側で語つたのである。人形遣ひも、その頃はからだを現はして使はず、幕の蔭から人形を差し上げて遣つたもので、「蔭語り蔭遣ひ」と呼ぶ演出形式であつた。それが次第に「出語り出遣ひ」といふ形式に移行し、結局今日のやうな演出形態になつたのである。それでも、東京興行の場合のやうに、人形遣ひが序幕から切りまで、黒の頭巾をかぶらずに、出遣ひばりといふやうなことは、ごく近年になつての現象です。人形劇として見れば、人形遣ひは頭巾をかぶつてゐるのが本來であること申すまでもありません。

人形芝居といふものは、世界中に分布されてゐます。未開既開の民族を問はず、甚だ廣く、また古く行はれてゐる。けれども、日本のやうに發達したものは、殆ど類例がありません。淨瑠璃といふ音楽は別としても、「假名手本忠臣藏」や「菅原傳授手習鑑」のやうな、大きなスケールの人形劇臺本といふものや、或は三人遣ひの人形で複雑な演出をするが如きものは、嘗てないとされてゐる。

（月刊「文化日本」八月號所載）
河竹繁俊氏稿より抜粹



市若丸初陣の段

後	前	中
鶴竹豊豊	鶴竹豊豊	野竹野竹
澤本澤竹	澤本澤竹	澤本澤本
重南仙呂	重南仙呂	八雛喜文
部太	部太	代之太
造夫糸夫	造夫糸夫	造夫助夫

和^わ田^だ合^{がつ}戦^{せん}女^{をんな}舞^{まひ}鶴^{つる}

市若丸初陣の段

元文元年（二三九六）三月、豊竹座初演。
 作者は並木宗助。この市若丸初陣の段はその三段目に當り、二段目の切板額門破り、四段目阿闍利の場と共に全曲中殊に有名である。

梗概

先將軍頼家の妾腹に善哉丸と呼ぶ一子があつたが、尼將軍は之を僧として鶴ヶ岡の別當に預け、將軍實朝に子がなかつたから萬一の場合の後継ぎにもと淺利與市、荏柄平太の兩人にこの善哉丸を奪はしめ、平太の子として名を公曉と改め、尼將

人形役割

市若丸初陣の段

腰元大ぜい	市若丸	尼將軍	土肥實千代	宇都宮岩若	佐竹梅若	千葉瀧若	千葉祐若	佐々木綱若	公曉丸	荏柄綱手	板額女	淺利與市
大ぜい	桐竹紋司	吉田小兵吉	吉田玉米	吉田利男	吉田兵次	桐竹紋之助	桐竹門次	吉田玉枝	吉田文枝	吉田文作	桐竹紋十郎	吉田玉藏

軍は平太の妻綱手と共にこれを守護して與市の家に匿れる。話變つて荏柄の平太が主を殺したと云ふ事から罪がその子公曉に及ぶこととなり、實朝は淺利與市にその首を取れと命ずる。與市は是非なく己が一子市若丸を公曉討取りに向はした。心に思ふ所のある與市は忍びの緒の切れた兜を著せてその初陣に立たしたのである。市若丸は母板額と久し振りの對面をする。そして父の命で公曉の首を取りに來たと語る。板額は尼將軍にその由を傳へると尼將軍は公曉は實は頼家の子で、善哉丸であることを明す。板額は夫與市の本心を悟り、自分に市若を殺して幼君の身替りにせよとの意であることを知り慨く。夫與市も垣の外に窺つて共に涙を流す。市若丸は何事も知らず早く手柄をさしてと逼る。板額は心を決し、隣室より計略を以て市若こそ眞は主殺し荏柄の平太の子である如く



思はしめ、市若はそれを恥ぢて自害する。斯うして市若の身替りで公曉、實は頼家の一子善哉丸は危き所を助かる。板額は市若丸の首を落し門前に向ひ荏柄の平太の子公曉の首渡さんと叫び、夫與市はそれを受取り實朝の實験に供へんと皆々涙の中を立ち出づる。



三人座頭の段 福の市

徳の市

玉の市

鶴	竹	豊	豊	竹	竹	竹	豊	竹	豊	豊
澤	本	竹	竹	本	本	本	本	本	竹	竹
	土	松	駒	隅	宮	津	常	千	文	呂
	佐	島	若	若	太	磨	子	路	太	太
叶	尾	太	太	太	夫	太	太	太	夫	夫
	太	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫

盲杖櫻雪社

三人座頭の段

本曲は官位を頂きに京に上る三人の座頭が
 面白い節につれて、振りをかしく踊り狂ふと
 云ふ目出度いものである。初演は御靈文樂座
 の明治十七年十一月興行で、三人座頭として
 忠臣藏の道行の引拔きに上演したもので、人
 形は福の市を初代玉造徳の市を初代玉助、富
 の市を先代紋十郎が勤めたその後二回許り上
 場されたが、昭和六年十一月當文樂座で「盲
 杖櫻雪社」の外題で上場を見、昭和十四年四
 月興行に次ぐ此度が第六回目の上場である。

(床本) 三人座頭の段

何事も辛未の明の春、盲杖櫻ゑにしとて人丸様の

人形役割

三人座頭の段

福の市 吉田 榮三
 徳の市 吉田 文五郎
 玉の市 桐竹 紋十郎

鶴澤 叶太郎
 野澤 喜代之助
 鶴澤 八造
 豊澤 友太郎
 鶴澤 友三郎
 豊澤 廣二
 竹澤 廣團
 豊澤 彌作若

みやしろに、雪白妙の朝霧も、晴れるや注連の飾り蝦、位取りとて都をさして急ぐ道さへ冬の空危い所をヲ、サ合點ぢや野梅山、梅香を聞く計り名所古蹟も知ぬが佛探りくゝて急ぎ來る、詞何と徳の市福の市コウ三人連立て官を貰ふて逝でから仲よふしやうぢや有るまいかヲ、コリヤ玉の市の云通り長の道中連立も他生の縁でも有ふかい、しかし福の市は足弱で世話がやけるで困つた事、ア、コレ徳の市其様に足べたをそしる者じやないわい其替りおれに一ツの隠し藝在所踊りをうさはらしにちよつと踊つて、ア、ウハ、、聞かしてやろうかい、コリヤ面白い、我等も俱に一踊り、サアく早ふに福の市は扇をしやんと座を構え、沖の白帆の雲隠れ春は曙の朝景色、ちよつと此目が明石瀉我にも見せよや人丸の和歌の守神、おいらもちよつとはなる口の杓とふの見すがらくみかはしたる大瓶の、酒が言はする口拍子、按摩疔癖針とふくの朝は迅ふからおちこちの流渡りの大井

頭

三人



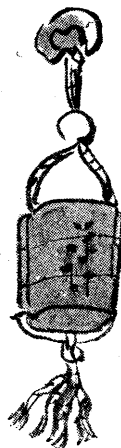
序



川、連臺ならぬ肩車、我手で諷ふ小寶ぶし、一に
 權現ナア、へ、二に玉津島、三に下り松ナア、
 へ、四に鹽釜よ、天の橋立切戸の文珠文珠様はよ
 けれ共、切戸の文字が氣にかゝるく來るか
 と濱へ出て見ればノウホイ濱の松風頃やまさるサ
 やとかけのホイ、眞赤となすいた水仙すかれた柳
 のホイノ心せきちく氣は紅葉、サアトカケマツカ
 トナ池のくエ、鱧めが朝日に輝く夕日になびく
 眞菰の小影にちよつと出ちよつとはね二度サ出て
 はねた、ヤレはねたがどうすりや鱧と娘ははねた
 が賞玩ハレワイヤコレワイサノ田舎踊の面白さ早
 入月に花に風ねぐらを急ぐ三人連杖を力にたどり
 行く。

伊賀越道中双六

沼津里の段
平作内の段



沼津里の段

竹本大隅太夫
豊澤廣助
鶴澤友造

平作内の段

豊竹古靱太夫
鶴澤清六
野澤吉藏

人形役割

沼津里より平作内の段

親作 桐竹門造

吳服屋重兵衛 吉田榮三

嫁およね 吉田文五郎

荷持安兵衛 吉田光玉徳

池添孫八 吉田光之助

梗概

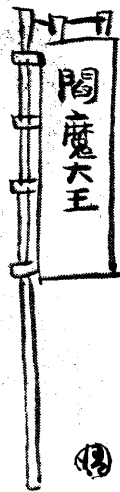
天明三年（二四四三）四月、竹本座初演。作者は近松半二、近松加作の合作。忠臣藏、曾我兄弟と共に日本三大敵討の一つ、荒木又右衛門の伊賀越の敵討を骨子としたもので、全曲は第一鶴が岡の段、第二行家屋敷の段、第三圓覺寺の段、第四郡山宮居の段、第五郡山屋敷の段、第六沼津の段、第七關所の段、第八岡崎の段、第九伏見の段、第十敵討の段の十段からなつてゐる。

鎌倉の商人吳服屋重兵衛は旅で、沼津の近くまで来たが荷持の安兵衛を有事で元との道へ歸した



此驛の平作といふ爺に荷物を持たしたが年取つてゐるので思ふにまかせぬ内、石につまづき生爪を割した。重兵衛は所持の薬をつけて勞つて遣る所へ娘お米が來た、委細をきいて重兵衛を我家へ迎へた。平作の家は貧しいくらしであつた。重兵衛今夜は此家に泊ることになつた。夜ふけた頃お米は印籠を盗む。目さめた重兵衛は仔細を問ふと、其身は以前江戸吉原の遊女瀬川の果てとわかり、夫渡邊志津馬が不慮の怪我を救ひたいばかりに最前父の傷が即座に治つた妙薬であるから盗んだと涙ながらに詫び入る。平作は盗みをするとは何事だ、幼ない時に養子に遣つたたつた一人の兄にも濟まぬと嘆き悲しむ。重兵衛はその兄と云ふのは何者だと聞く。それは鎌倉八幡宮の氏子で幼名は平三郎、母の名は「とよ」と書いた守袋をつけてあると平作は語る。重兵衛はひしと胸に應へたがわざと名乗らず、次ぎの下りまでに石碑を建て、くれとて金子を渡して行く。

その跡には印籠と臍の緒書きが残つてゐた。平作は我子と知り、お米は澤井股五郎が持つた印籠と知つて驚く。千本松原へ追ひ付いた平作は股五郎の行衛を重兵衛に尋ねるが、重兵衛は股五郎に恩を受けた義理を思ふて容易に打明けない。平作は遂に腹を切つて死んで行く身に聞かしてくれと頼む。義理と恩愛の斷末魔に迫つた重兵衛は鋏蔭に忍んだお米と池添孫八に聞かすやう「股五郎の落つく先は九州相良、吉田で逢ふたと人の噂」と云ふ。平作と重兵衛は相抱いて親子の名乗り死に行く名残りに泣き入る。雨は一しきり降りつゞいて平作は落入る。



攝州合邦辻

合邦住家の段

合邦住家の段 前豊竹駒太夫

鶴澤清二郎

切竹本津太夫

鶴澤寛治郎

人形役割

合邦住家の段

親合邦 吉田榮三

合邦女房 吉田小兵吉

玉手御前 吉田文五郎

奴入平 吉田玉市

俊徳丸 桐竹紋太郎

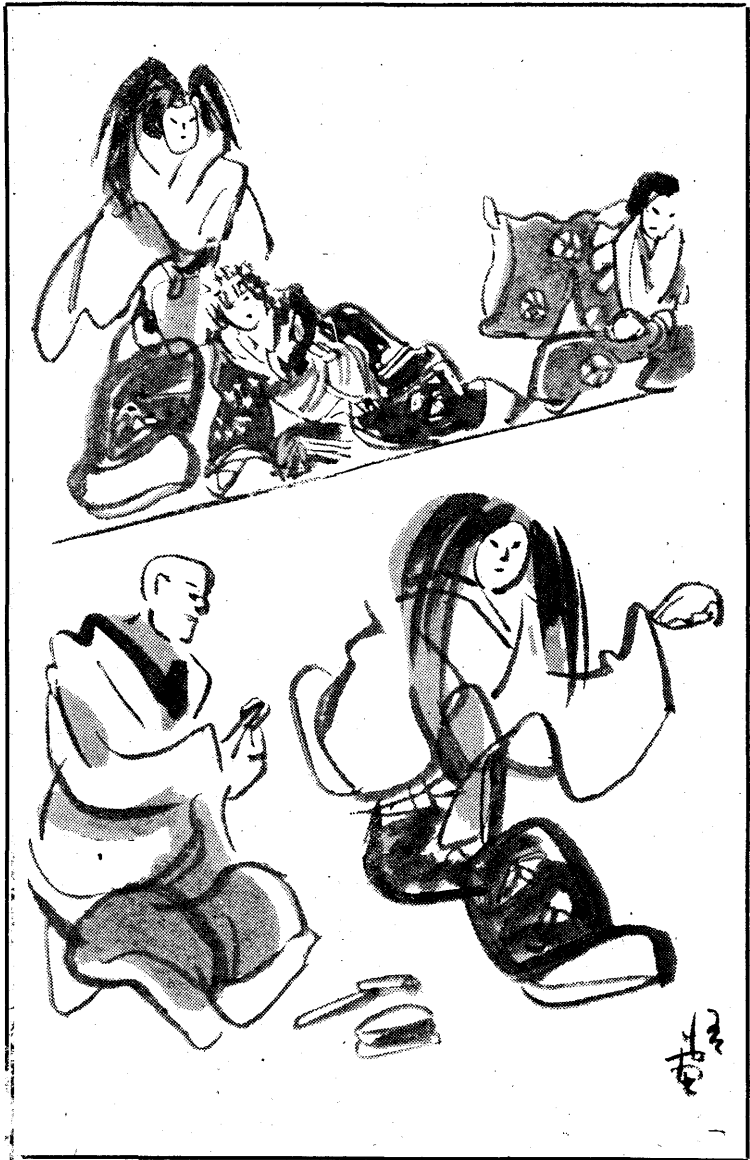
浅香山 吉田榮三郎

安永二年（二四三三）二月、大阪北堀江座初演作者は菅專助、若竹笛躬の合作。全曲は上下二卷より成り、上の卷は發端があられの松原毒酒の場、中が高安館、切が繪旨取戻しの場、下の卷は口が天王寺西門の場、切はこの合邦住家の段に分れてゐる。

梗概

安井合邦の娘お辻は、氏なくして玉の輿、河内の國の領主高安左衛門の後妻玉手御前と云はれる身になつた。

所が如何なる天魔が魅入つたのか、義理ある先妻腹の子俊徳丸に想ひを寄せ、何かと云ひ寄るの



若

で俊徳丸は道ならぬ戀に堪えかねて、許婚の淺香姫と手をたづさへ玉手の親の合邦の庵室へと身をさけたのであつた。この事を知つた玉手は、尙も俊徳丸の後を慕つて合邦の庵室まで追つて來たけれど、合邦は俊徳丸から娘玉手の邪戀を聞かされて居るので、高安殿への義理を思ひ、どうしても門側も踏せぬと、内へ入れやうともしなかつた。然し追に母は女の身の心弱さから、玉手を幽霊と云ふ事にして、幽霊ならば入れても仔細はありませんまいと合邦を説き伏せ、漸く内へ入れて不義の云ひ譯けを聞かうとした。と玉手は云ひ譯けどころか「思ひ切られぬ戀の道、俊徳様の御行方尋ね、女夫にして下され」とかき口説くあり様なので、合邦は今更の様に呆れ果て、俺も以前は青砥某と云ふ歴とした武士、浪人しての捨坊主ながら、誠の道を通して來たに、と怒り立ち、唯一刀に斬つて捨てんとした。

母親は、これをなだめ、必ず娘に思ひ切らせて

見せますと、玉手を無理に奥の一ト間へ連れて行つた。

折柄奴入平は俊徳丸の後を尋ねて來たのだつたが、フト玉手の姿を見付けて、様子をうかゞはんと傍に身を忍ばせて居たが、一ト間から兩眼盲た俊徳丸が、淺香姫に手を取られて、なよなよと現れるので、入平は、斯くまで玉手御前が執念くつきまとう上は、一刻も早く此の家をお立ち退きあれかし、と既に伴ひ出やうとした。

その時玉手は奥から走り出で、俊徳丸に取り纏り、入平の意見の言葉も耳に入れず、又しても切ない戀をうつたへるのでつた。

これを耳にした合邦はたまりかね、一刀脇腹深く刺し通し、その息の根を止めやうとするので、玉手は是を、しばしと止め、痛手に惱みながらも「是には深い様子のあること」と自分の苦衷を物語つた。

それは、高安の妾腹次郎丸が奸臣坪井平馬と心

を合せ、己が家督を繼がんものと、その爲に俊徳丸の一命を奪はんとしてゐる事を知つたので、心にもない戀をしかけ、毒酒に形相を變へさせたのも、御家督さへお繼ぎなくばお命に別状なからうと、思ひ餘つての思案だと云ふのである。そして又、かうしてお後を慕ひ參つたのは、此の病を本復させるため、と云ひつゝ手にする鮑員を出して寅の年月揃つた我が血汐を盛つて俊徳丸に飲ませると、不思議や人相はもとの通りになるので、一同は初めて玉手の苦計を知つて今更涙にくれるのだつた。その時にはもう玉手の最期は近づいて居た。合邦が取り出す百萬遍の珠數の輪の中で、玉手御前は一同に見守られつゝ大往生を遂げたのであつた。



情



へは只一つと悪びれもしない。岩永は氣をいらち申し付けた責道具を持ってと命ずると、奴共は手にく手桶、階子、さい槌、棒などを持つて来る。重忠はこれを押止め、女一人に白狀さすに仰々しい責道具は無用と、申し附けた琴、三味線、胡弓を取り寄せる。岩永は不興氣に責道具とは此樂器の類ひ、こりや詮議に事寄せて慰みせらるゝかと詰りかゝるが、重忠は唐土の故事を引いてこれをなだめ、阿古屋に三曲を演奏させる。

糸竹の調は整然として一糸も亂れぬ。重忠はその音色によつて實際景清の在所を知らぬ事を知り岩永の不承知を退けて、阿古屋を己が屋敷へ伴ひ歸へる。



14

佐 和 利 集

市若丸初陣の段

後に残りし板額が涙の顔を振上げてノ
ウ聞へぬぞや我夫、公曉を頼家のお
胤と言ふ事知つてならなげ打明ては
くだされぬ可愛そふに市若を討手と
言てすかし越忍びの緒を切かけて母
に結んで貰へとはわしに切との事な
るか、お身代りと云事を虫がしらし
て其時にかゝ様わしは討死をするの
かいのと氣にかけし、今思へばハア
神の告、告共知らず餘所の子の華々
しきを見るに付、此市若はなぜ遅い
來そふなものと死る子を待兼たのは

何事ぞ、殺しにおこすと知つたらば
待まいものをとしやくり上げ歎けば
夫は塀の外忠義ならずば何故に願ひ
好んでおこそふぞ、とゞ様手柄をし
てかふと勇すすんで出た時のおれが
心を推量せよ、せめてま一度逢たさ
に忍んで來たと延上り足爪立ても高
塀に隔の思ひはいとゞ猶涙轢出すば
かりなり。

沼津里の段

私故に騒動起り、其場へ立合ひ手疵
を負ひ、一旦本腹有つたれど、此頃
は頻りに痛み、色々介抱盡せども効

無く、立寄る方も旅の空、此近所で
御養生、長しい間に路銀も盡き、其
貢に身の廻り、櫛笄まで賣拂ひ、悲
しい金の才覺も、男の病ひが治した
さ、先程のお咄しに、金銀づくでは
無いとの噂、燈火の消えしより、あ
の妙薬をどうがなと、思ひ着しが身
の因果、どうぞお慈悲に是申、今宵
の事は此場切、お年寄られしお前に
迄、苦勞をかけし不孝の罪、けふは
死なうか翌の夜は、我身の瀬川に身
を投げんと、思ひし事は幾度か、死
んだあとでもお前の歎きと一日ぐら
しに日を送る、どうぞ御慈悲に御了
簡と、東育ちの張もぬけ、戀の意氣
地に身を碎く、心ぞ思ひやられたり

合邦住家の段

嘘か〜と箸持つてくゝめる様な母

の慈悲。面はゆげなる玉手御前、母さんのお詞なれどいかなる過去の因縁やら、俊徳様の御事はねた間も忘れず戀こがれ思ひあまつて打付にいふても親子の道を立て、つれない返事かたい程猶いやまさる戀の淵いつそ沈まばどこ迄もと後をしたふて歩はだし、あしの浦々難波がた身をつくしたる心根を不便と思ふて俱々に俊徳様の行衛を尋ね女夫にして下さんすが親のおじひと手を合せ拜みまはれば母親も今更あきれ我子の顔たゞ打守るばかりなり。

阿古屋琴責の段

かげと言も月のゑん、清しといふも月のゑん、かげきよき名のみにてうつせど袖にやどらず、重忠耳をそは

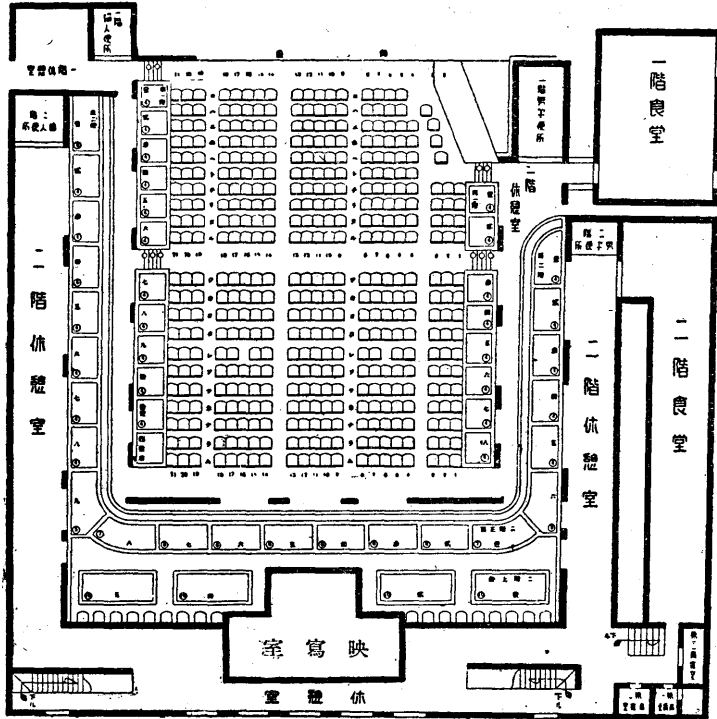
だて賜ひ、今彈ぜしは露組の唱歌を我身の上に取り、景清が行衛しらぬとな、まあ知らずんばしらぬにせよして景清と其方が馴初しはいつの頃いかなる事の縁により、深い契りの年とはなりしぞ、是はまた思ひもよらぬかはつた事のお尋ね、何事も昔となる、はづかしい物語、平家の御代と時めく春、馴にし人は山鳥の尾張の國よりながくしき野山をこへて清水へ、日毎々々のかちまふで、下向にも参りにもみちはかはらぬ五條坂、互ひに顔は見しり合ひ、いつ近付になる共なく羽織の袖のほくろびちよつと時雨のから傘お安い御用雪のあしたの煙草の火、寒いにせめてお茶一ぶく、それがこふじて酒一つ、こつちに思へば、あちからもくどくは深い観音經ふもんぼん第廿五

日のよき、必ずとたはふれの詞をむすぶなごやおび、終りなければ初めもない、あぢな戀路を樂しみに、壽永の秋の風立て須磨や明石のうら船にこぎ放れ行ゑんの切れめ、思ひ出すも、つかへのどく、ア、うとましやと語りける。

翠帳紅閨に枕ならぶる床の内なれし衾の夜すがらも四つ門の後夢もなしさるにても我がつまの秋よりさきにかならずとあだし詞の人心、そなたの空よと眺むれど、それんと問ひし人もなし。

よしのたつたの花紅葉更科越路の月雪も夢とさめては後もなし、あだしの露とりべの煙はたゆる、時しなき是が浮世の誠なる。

内案御席場御座樂文



御、觀、覽、席、は、大、部、分、椅、子、席、に、な、つ、て、居、り、ま、す、か、ら、お、一、人、で、も、御、愉、快、に、洋、服、で、も、お、樂、に、御、見、物、が、出、來、ま、た、お、出、入、が、御、自、由、で、す。

前、賣、切、符、・、壹、等、席、の、お、切、符、は、五、日、前、か、ら、發、賣、致、し、ま、す、ま、た、五、日、以、後、の、お、切、符、も、壹、等、席、に、限、り、御、豫、約、申、上、げ、ま、す、か、ら、上、圖、の、座、席、表、に、依、つ、て、お、早、く、御、望、み、の、御、場、席、を、お、申、し、込、み、に、な、れ、ば、お、心、の、ま、ま、に、お、好、き、な、處、が、御、自、由、に、と、れ、ま、す、御、用、命、の、お、節、お、呼、出、し、の、電、話、は

南、四、七、壹、壹、番、で、御、座、お、ま、す

切、符、賣、場、右、指、定、席、切、符、は、當、日、前、賣、と、も、正、面、西、側、本、家、入、口、に、て、發、賣、し、て、居、り、ま、す

二、等、席、・、三、等、席、切、符、は、當、日、正、面、入、口、に、て、發、賣、致、し、ま、す

二十月の芝居案内

川湊戸神 場劇竹松 四〇四四川湊話電	條四都京 座南 五五一一園話電	堀頓道 座角 二一二二南話電	堀頓道 座中 九七二一南話電	阪大 座伎舞歌 六二八二戎話電
日初日一 演開午正	日初二 開時一十晝 演半時四夜	日初日一 演開時四	日初日一 開二午正晝 演部時五夜	日初日卅 幕開半時四
新興キネマ演藝部公演	吉例 顔見世興行	新生 新派	大歌 舞伎	曾我廼家 五郎 劇
	幡平壽か鶴 隨家式す 院女三み退 長護番の 兵衛島叟城治 (晝の部) 六一小國 歌谷姓 仙嫩鍛爺 容軍合 彩記冶戰 (夜の部)	第一一人 第二黒 第三晴 髪の影 小袖心	菅原傳授手習鑑 大石最後の日 めをと人形 桃山譚 鳥沙國飾御 さく民間宅兵 しみ兵衛牛 (晝の部) (夜の部)	第一スバイ御用心 第二和合橋 第三良 第四香椎の馬方 第一第二第三第四
	一二三四五 等々等 席席席 一部観劇料 (六二二一五 税別)〇九〇〇〇〇	特一二三四五 等々等 席席席 観劇料 (三二二一五 税別)〇八九八二八五	特一二三四五 等々等 席席席 一部観劇料 (二二二一五 税別)〇八〇五二八五	一二三菊櫻 等々等 席席席 観劇料 (三二二一五 税別)〇二五〇八四

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は

既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場でゐります。

文樂座人形淨瑠璃は

常に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず

日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ませう、皆様の御期待に背かぬ様、皆様に御満足して頂けるやうと一回不斷の努力を致して居りますが尙御氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

御携帶品は

正面一階に御預り所が御座ります。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雑致しますからお服物は成べく終演一幕前に御受取願ひます。

貴重品は

各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます

お煙草は

一階二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座ります。

賣店は

二階東側と一階西側休憩所に御座ります。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座ります。

場内にて寫眞撮影は絶對にお断り致します。

御休憩の間は一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ります。

お出口は 下足札赤札は正面西本家人口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號入マークを附けて居りますから御用の節は御申附下さい、其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願ひいたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから豫め御諒承願ひます。

◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じ、よろづ御案内申上ける事に致しました。御一報次第登壇、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南①三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十五年十一月三十日印刷
昭和十五年十二月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地
發行所 松竹株式會社大阪支店

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店內
編輯兼 發行人 鳥江鏡也

大阪市西區土佐堀通一丁目十二番地
印刷所 永井日英堂印刷所

一 部 金 二 十 錢

文樂座南一食堂

賜命下御に前幕一は用御の事食御
すまい座御で利便御極至ばれは

(てま時八らか時五)間時事食御

大阪四ツ橋

南温泉料理

御宴會にも
御家族連にも

電話南
①七

一	一	一	一	七
三	三	三	三	〇
三	三	三	三	
四	三	二	一	一
番	番	番	番	番

